

太平洋戦争前の在米日本人移民とナショナリズム

米 山 裕

はじめに

日本人移民の祖国観というと、1983年に出版された山崎豊子の『二つの祖国』、特にそれをNHKが1984年に大河ドラマ化した『山河燃ゆ』をめぐる論争が思い起こされる。日系アメリカ人から出された批判は、日系人にとっての祖国はアメリカであり、日本ではないというものであった。日本、アメリカ双方で様々な発言がなされたが、そのほとんどは、日系二世にとって日本に対するナショナリズムは存在しなかったという「公式見解」の域を出るものではなかった。

日系移民史においてはこの問題は忌避されてきた。そのため、日本人移民の祖国観に関する研究はほとんど存在しない。筆者は以前に、戦前の日本人移民コミュニティでは、日本に対する愛国心は当たり前のことと考えられていたことを指摘した。さらに、一般に米国への忠誠で知られる日系市民協会（Japanese American Citizens League, JACL）ですら、1930年代末に至るまで親日的態度を捨てなかったことを示した。イチオカの研究は、一世が日中戦争に際して日本支援を行ったことを指摘した。ハヤシの研究は、一般的に仏教徒と比較するとキリスト教徒はアメリカ化が進んでいたとされているのに対し、キリスト教徒の移民も強い愛国的態度をとったことを明らかにした⁽¹⁾。数は少ないが、このような先行研究が教えてくれることは、日本人移民の祖国問題の根深さである。殊に、一世を含む「日系アメリカ人」の合衆国に対する忠誠が強調されてきた日系移民史の動向と照らし合わせると、大変興味深い。

このような、移民集団が祖国に対してとるナショナリズムは珍しいものではない。しかし、日本人移民のナショナリズムは歴史の片隅に片づけられてきた。そこで本論では、日本人移民の間に見られた祖国観、特に移民の祖国に対する態度、感情の問題を中心に太平洋戦争までの移民史を概観し、そして、なぜこの問題が扱われてこなかったのか、それが日系移民史のどのような問題を明らかにするのか、祖国問題の追究が移民史研究にとってどのような意義を持つのか、考察したい⁽²⁾。

日本人移民と祖国

日本人移民の日本に対する態度は、一定であったのではなく、移民自身の状況、アメリカ社会のあり方、日本のあり方、日米関係など、様々な要因に呼応して変化した。移民世代がコミュニティの主導権を持っていた時代は、太平洋戦争開始まで続いたが、それを、大きく三つに分けることにする。同化期、文化多元主義期、ナショナルリズム期である。

同化期は、1895年までを指し、その特徴は、移民コミュニティの一時性、移民のアメリカに対する好意的態度、日本に対する無関与などである。この時期は、所謂書生移民が多く、彼らはアメリカの高賃金に惹かれると同時に、アメリカの文明、思想などに興味を持ち、留学という名目のもとに渡米した。仕事は、山林労働、鉄道建設などの季節労働あるいは住み込みの家庭内労働が多かった。このような移民集団は、旅館、食堂、斡旋業などの、一時的滞在者向けのサービスの他は、コミュニティ内で発展させる必要がなかった。また、家庭内労働をするものは、基本的に白人社会に寄生していたので、これもまた、独自のコミュニティの発展を促さなかった。そして、当然、移民のほとんどは男性であった。

アメリカに対する態度は、明治中期までの脱亜入欧思想を反映して、学習志向が強かった。また、アメリカ社会も書生移民の存在を好意的に受け入れた。書生たちは、自分たちがいかにアメリカに同化し、受け入れられているかを強調した。彼らは、アメリカ社会の人種階層性を全く理解しなかった。それゆえ、排華運動を見ても自己が基本的に中国人と同じ立場にあることを理解するどころか、中国人を見下す言動をとったのである⁽³⁾。当然、アメリカ社会で受け入れられるために特別な態度、行動をとらなければならないのではないかと、というような問題意識も生じなかった。

移民はまた、いずれは帰国するつもりではあったので、祖国のことに大きな関心を持っていた。しかし、滞米中に書生の立場のまま、日本のことに関与するつもりはあまりなかった⁽⁴⁾。彼らの関心は、帰国後、日本社会で活躍することであり、アメリカにおける滞在を一時的なものとし、見なしていたと言える⁽⁵⁾。

日本の国際的立場も、移民の愛国的行動を特に促すようなものではなかった。明治政府は、条約改正を目指して地位向上に努めていた。アメリカ政府は東アジアにおけるロシア牽制に日本が役立つと考え、日米関係は基本的に良好であった。このような状況下で、アメリカ駐在の日本外交官は、移民に批判的だった。例えば珍田捨己は、当時盛んだった排華運動が日本人にも及ぶことを懸念して、移民の選別を政府が行うことまで提案した⁽⁶⁾。官僚は、人種階層性についてはともかく、階級の問題は理解できた。移民を無知蒙昧の下層民と見た官僚の目は、アメリカ人が中国人を見る目のある程度理解していた。そして、移民のアメリカ社

会に置ける立場が、日本の国際的立場に悪影響を及ぼすことを恐れたのである。そのため、移民と外務当局との関係はむしろ対立的であった。

同化期の日本人移民は、アメリカ社会で一般的な同化⁽⁷⁾の概念、信念に従って、アメリカにとけ込もうとしていた訳ではなかった。彼らは、日本人であることを捨ててアメリカ人になろうとしたのではない。しかし、日本を盲目的に賛美し、日本の風俗習慣に固執し、国家に忠誠を尽くすつもりは全くなかった。日本に欠けているものをアメリカで学び、それを自己の人生に役立てようとしていたのである。その意味で、彼らは基本的にアメリカを志向しており、筆者はこの時期を同化期と呼ぶことにしたのである。

その次の文化多元主義期は、1895年より1925年までを指すが、上記の要因すべてに大きな変化が見られる。その特徴は、移民コミュニティの発展、アメリカの排日運動に対する移民の対応、日本政府との密接な関係などである。移民の主体は農民を中心とする、労働移民になる⁽⁸⁾。大農場における農業労働者から、小規模自営農業へと転換し、日本人が農産物の流通、販売まで進出する過程で米国滞在は長期化し、経済的にある程度自立した移民コミュニティの発達をうながした。写真結婚によって妻を呼び寄せるものも多く、家庭生活も営まれるようになる。

アメリカ西部農業における日本人の活躍、そして目立つコミュニティの形成は、アメリカ社会の反日感情を刺激した。それは、十九世紀末の散発的かつ地域的な排日事件と異なり、革新主義運動と連動して、市、州などの地方自治体の政治を動かす排日運動の形をとって現れる。1906年のサンフランシスコ学童隔離事件は、日米両政府を巻き込んだ外交事件に発展し、1913年、1920年のカリフォルニア州外国人土地法、1924年の移民法に至るまで、何度も州、連邦レベルの問題になる⁽⁹⁾。このような排日運動に対処するため、各地の日本人移民は日本人会を作り、自己の利益を守るべく活動するようになった。日本人会は、会員の相互扶助の他、アメリカ社会に対するキャンペーン、排日法に関する法廷闘争、移民コミュニティ内の利害の仲裁、各地の日本人会同士の連携など様々な活動してゆく。

このような日本人会の活動は、日本政府の利益と合致するものであった。海外における日本人に対する法的差別の撤廃、白人との平等の実現は、前述したような、国家としての日本の欧米諸国に対する平等の実現と関連があったからである。外務当局は、一方でアメリカの要求に応じて、移民の質に問題があるという発想から来る、出移民の選別政策をとるが¹⁰、その一方で、日本人会の活動を様々な形で支援して排日運動に対抗してゆく。特に重要だったのは、移民が一時帰国する際に必要な在留証明の発行権を日本人会に与え、手数料を徴収させることによって、日本人会の移民コミュニティに対する影響力を増大せしめたことである¹¹。

排日運動と戦う中で、日本政府と密接に協力するようになった移民は、日本に対する関与を深めてゆく。例えば、日本海軍がロサンゼルスに寄港すると、毎回のよう羅府日本人会は大規模な歓迎会を催し、そのための寄付金を地区別に集めた。天長節の行事も大がかりなものになってゆく。これは、移民がアメリカ社会に背を向けたことを意味しなかった。アメリカの第一次世界大戦参戦に際しては、自由公債の購入、米国赤十字に対する寄付を日本人コミュニティとして積極的に行い、アメリカ社会に対する貢献を重要視した。

文化多元主義期の日本人移民は徐々に定住志向を強めていった。アメリカ社会との関係は密接になり、個々の移民の目的はいずれ帰国することであるものの、その目的の達成のためには、安定したコミュニティの存在が不可欠となった。一方、アメリカ社会は日本人に対する批判を強め、排除しようとした。こうした中で、アメリカ社会において生存してゆくために移民がとった立場は、アメリカ社会が様々な異質のグループでできあがっており、それがアメリカにとって良いことである、日本人の存在もアメリカのためになるのである、といったものであった。これは、1915年にカレンが提唱した文化多元主義¹²と合致するものである。

ナショナリズム期は、1925年より1941年までを指し、その特徴は、移民コミュニティからエスニック・コミュニティへの変質、アメリカに対する幻滅、二世の将来に対する不安、日本に対する心情的回帰などである。1924年の移民法により、日本からの新規の移住は禁止されることになった。密航、カナダ・メキシコ経由の密入国を別とすると、コミュニティが存続するとすれば、第二世代の増加において他になかった。実際1915年から1925年を出生のピークとして、二世の数は急増する。アメリカ市民権を持った二世の存在は、移民コミュニティに、アメリカ社会の一員としての特徴がより明確なエスニック・コミュニティとしての性格を付与することになる。

十年以上にわたる様々な努力にも関わらず、日本人は、連邦最高裁によって「帰化不能外国人」と規定され¹³、帰化不能外国人であるが故に土地を所有・賃借して農業を営むことも、さらには新たな移民をすることも不可能になってしまった。このことは、移民に深い幻滅と無力感を与えた。また、多くの二世が高校を卒業する頃には、大恐慌に見舞われ、親の事業も子供の就職もままならなかった。移民はアメリカで生活を続けることに不安を覚えたが、さりとて日本語のあまりできない子供を連れて帰国することは、失敗者として故郷で肩身の狭い暮らしをすることを意味していた。

大陸における日本の「躍進」は、このような状況の中で苦悩する移民にとって頼もしく映った。満蒙に新天地を求めて移住する人々は彼らの「仲間」であったし、移住者を保護する日本政府の存在は、まさに彼らに欠けているものだった。さらに、国際的非難の中、連盟を

敢然と脱退し、胸を張って孤高の道を進む祖国、そしてその代表松岡洋右¹⁴は、移民の尊敬を集めた。1931年の満州事変、1937年の日中戦争勃発の際は、アメリカの対日世論の悪化を防ぐため、日本人会、日本語新聞記者などが、パンフレットを作成したり、アメリカ人向けに講演を行ったりした。日本軍兵士のために慰問袋を集め、送ることも盛んに行われた。また、アメリカ生活をあきらめ、日本統治下の満蒙、あるいは南洋に活路を見いだすことも真剣に議論された¹⁵。

移民は、日米関係が悪化するにつれ、このような態度を保持することに不安を感じるようになった。1939年の日米通商条約破棄をきっかけに、二世団体である JACL は明確なアメリカ主義をとるようになる¹⁶。しかし、悪化する対日世論のもとでも、多くの移民と相当数の二世は JACL の「建て前」に従うことができなかった。太平洋戦争が始まって、敵国人としてアメリカで生きてゆかねばならなくなっても、彼らはアメリカに歩み寄ることを拒否した。キャンプの中で、強制収容に協力的だった JACL の幹部が「犬」としてリンチにあったのも、このような心情を背景にしている¹⁷。

ナショナリズム期の日本人移民は、アメリカ社会での生活に自信を失い、また一方で、大陸に躍進するかの如く見えた故国の姿に引きつけられた。文化多元主義期のような考えももちろん残ってはいたが、日本人としてのナショナリズムが支配的となった。

日系移民史の成立状況

以上のような移民コミュニティの歩みは、日系移民史に正しく反映されてこなかった。同化期とナショナリズム期の研究はほとんど進んでいない。同化期については、史料の欠如が最大の原因となっている。1906年のサンフランシスコ地震のため、当時本土の在留民の半数以上がいた、最大の日本人移民コミュニティはほとんど全滅し、それ以前の史料はほとんど残っていない。そのため、この時代の研究をすることがきわめて困難である¹⁸。わずかに残っている史料を、日本側の史料、例えば外務省の記録や新聞雑誌で補ってゆくしか方法はないと思われる。

ナショナリズム期についても同様の問題がある。1942年、本土の移民及び二世のほとんどが居住していた太平洋沿岸部から、強制退去、強制収容されたからである。強制退去が命じられる前から、連邦捜査局 (FBI) による重要人物の逮捕が相次いだ。移民たちが、日本とのつながりを示すものを処分したとしても何の不思議もないであろう。さらに、強制収容されるときには、両手で運べる荷物しか携行することを許されなかった¹⁹。つまり、特定の傾向の史料が徹底的に破壊された上に、残ったものの多くも散逸してしまったのである。

それに加えて、強制収容は、日系移民史に史料の散逸を越える大きな影響を与えた。太平

洋戦争が始まる前から米国に対する忠誠を表明していた JACL が収容所コミュニティの主導権を掌握したのである²⁰。JACL は、合衆国政府の権力を背景に、収容所内の自治、日系人と政府との交渉などの役割を演じた。無論、反発も強かったが、アメリカが日本に戦争で勝つと同時に、JACL の立場は「正しかった」ことが証明される。例えば、アメリカ国籍を放棄して日本への「帰国」を目指した二世のグループは、戦後、晴れて「帰国」したが、直ちにアメリカへの「帰国」と米国籍の回復を求めて動き始めることになる。JACL は彼らに対する援助を一切しなかった²¹。日本に対するナショナリズムの心情を捨てきれなかった人々は、こうして沈黙を余儀なくされていった。

強い反発を乗り越えて JACL が実現させた、収容所からの志願兵が、戦果を挙げてアメリカ社会の称賛を得て、戦後の日系人の立場は、戦前に比べ、はるかに向上する。特に、JACL が主要な目標にしていた移民法の改正が1952年に実現し、日本人の帰化が可能になった²²。老境に達し、故国に帰るよりは子、孫と共にいることを選んだ移民たちは、大挙して合衆国に帰化し、そのことを有り難いことだと考えた。ここにおいて、移民は子に従うことを選択したのである。移民は今や「一世」となり、アメリカ社会のエスニック集団の一員となった。彼らの心理は想像するしかないが、1960年代に面接聞き取り調査を行った阪田によると、多くの一世が戦間期に関する質問に答えるのをためらったり、拒否したりしたという。また、「過去を掘り起こす」ような面接調査そのものを拒絶するものもいたという²³。共通の記憶としての歴史は、彼らにとって不要なものとなった。二世も同様に沈黙した²⁴。スポークスマンは JACL だけであった。

白人の研究者もまた異議を唱えなかった。第二次世界大戦が終わって、日本人移民の存在の是非が社会問題とならなくなり、その研究はポレミックの呪縛から解き放たれたはずであった。しかし、そのほとんどは、リベラルな見地からの差別の研究となり、焦点は文化多元主義期の排日運動と、戦争中の強制収容に向けられる。イチオカが指摘したように、彼らの興味は移民自体にあるのではなく、移民を排斥・迫害した白人にあった²⁵。民主主義の総本山であるアメリカでなぜこんなことが起きたのか、という問題意識は、実は隠れた自己賛美であり、白人優越主義でもあって、少数民族を主体性を持った歴史の担い手として描くことは全く異なった視点である。

1970年代に入り、エスニック・スタディーズの勃興と共に、少数民族の歴史が要求されるようになる。エスニック・スタディーズは、アメリカ社会におけるエスニック集団の地位向上を目指す。その手段は、統合の場合も分離の場合もある。いずれの場合も、アメリカ社会の改革を目指すものであることに変わりはない。マルクス主義を唱えるグループは第三世界との連帯をうたうが、基本的なエスニック・スタディーズの立場はアメリカ第一主義だと考

えて良い。そのため、アメリカに移住した後も続いた移民とその祖国の関係を探ろうとする視点はここにも存在しないのである。しかも、エスニック・スタディーズの視点から研究を始めた者は、ごく少数の例外を除き、日本語を解さなかった。そのため、一世をパイオニアとして祭り上げる他は、新しい視点を提供することができなかった。

このような空白の中で、JACLはその政治的立場に沿った歴史書の出版を進めた。1969年に一般向けの *Nisei: The Quiet Americans* を、1976年には法制史である *The Bamboo People* を、1980年には学術的な歴史書の *East to America* を、そして1982年にはJACLの公式の歴史である *JACL in Quest of Justice* を出版する。1992年に農業史である *Planted in Good Soil* が刊行されて、1960年代に始まった計画が完了したことになる⁶⁹。これらの出版物の中で繰り返して語られたのが、一世も二世もアメリカ社会の良き成員としてアメリカに貢献してきたこと、そのため、排日運動、差別、強制収容は非人道的であるのみならず、根拠を欠いたものであったこと、そのような不正義を正すためにJACLが日系人、アメリカ社会のために闘い続けてきたこと、の三点であった。

JACLの公式見解は、強制収容に対する補償運動が始まるにつれ⁷⁰、ナショナリズムの研究を始めつつあった少数の研究者にも圧力として感じられるようになる。さらに、日系アメリカ人社会が、彼ら内部の対立を乗り越え、アメリカ政府に対して個人補償を要求する中で、このような公式見解に異議を唱えることは、運動に対する障害となる可能性も高くなった。また、公聴会で次々と述べられる、偏見に満ちた強制収容正当化論、公聴会そのものにも反対する強硬派を目の当たりにして、ナショナリズムの研究を発表することがためられるようになったのである。筆者は、その当時UCLAの日系移民史の研究者たちと、自分の研究が曲解されて政治的に利用されかねない状況であることについて話し合ったことがある。イチオカは、移民のナショナリズムに関する論文を1981年に完成していたが、雑誌で発表したのは、補償が決定した後の1990年であった。ハヤシもキャンプ内での反乱に関する研究を1987年にまとめたが、活字にすることは見送った⁷¹。このように、つい近年になるまで、日本人移民のナショナリズムに関する研究は、ほとんど存在しなかった。

おわりに

以上の考察は移民のアイデンティティーに関して、示唆を与えてくれるだろう。文化多元主義期に研究が集中し、しかも移民を「良き市民」として描こうとする傾向が強いので、移民はこの頃から完全にアメリカに定住していたのだというような錯覚を我々は抱きがちである。このような固定的アイデンティティー観は、日本人移民が抱えていた様々な祖国観、祖国に対する感情を無視した、平板な歴史像と同根である。

しかも、このような日本人移民像は、アメリカ社会における好ましい移民像に合致していた。アメリカ人は、移民がアメリカを安住のための別天地と見なし、祖国を捨ててやってくることを期待した。実際は、阪田が主張するように、「出稼ぎ」の形で渡米しているのであり、彼らが老いてアメリカ市民となるまでに、複雑な過程を経たとしても不思議ではないだろう。前山が示したように、移民は状況を自分で解釈し、それに応じて行動を決定したのである²⁹。

アメリカの移民史において、東欧・南欧から渡来した新移民の「出稼ぎ性」は、認識されてはいたが、真剣に取り上げられてこなかった。頻繁な、帰国・再渡米のサイクルは例外的現象として言及されるにとどまっていたのである。やはり、「正統」の定住論が、研究を妨げたのであろう。しかし、近年になって、ピオレ、サッセン、シネルなどの研究が出て、移民研究は変わりつつある。むしろ、「新移民」以降は出稼ぎ移民が正常であると認識し、それを、国際的な労働力移動として分析してみる、そしてアメリカと祖国の関係を考察する方向に動きつつある³⁰。移民史の動向については機会を改めて詳しく論じるつもりであるが、これは画期的な変化である。

祖国問題を扱うことは、日本人移民のナショナリズムに関わることであり、他の移民と関係の薄い、特殊問題に入ってゆくことでもある。明治の人間を理解するためには、明治の日本を理解する必要がある。もとより例外扱いされてきた日系移民史であるが³¹、一見特殊に見える祖国問題を手がかりとして、一般のアメリカ移民史につながる道が開けている。前段で述べた移民史の常識、移民の概念を変革する作業に、日系移民史は寄与し得るだろう。そういった意味で、祖国問題に注目する意義は大きいのである。

注

- (1) 米山裕, "The Forging of Japanese American Patriotism, 1931-1941" (修士論文, 筑波大学, 1983年); 米山裕, 「第二次世界大戦前の日系アメリカ二世と『アメリカニズム』」『アメリカ研究』第20号 (1984年): 99-113; Yuji Ichioka, "Japanese Immigrant Nationalism: The Issei and the Sino-Japanese War, 1937-1941," *California History* 69 (Fall 1990): 260-75, 310-11; Brian Masaru Hayashi, "For the Sake of Our Japanese Brethren": *Assimilation, Nationalism, and Protestantism Among the Japanese of Los Angeles, 1895-1942* (Stanford: Stanford University Press, forthcoming).
- (2) 移民と祖国の問題の実証的分析は、現在執筆中の博士論文にて行う予定である。このような感情の問題を扱う場合、合衆国以外の国に生まれ育った移民世代と、アメリカ人として育った二世以降の世代を区別することが必要である。そのため、本論では議論を移民世代に限定する。また、「祖国」とは移民の出身国、あるいは出身地を指すこととする。本論で扱う「移民」とは、労働を主たる目的としてアメリカ合衆国に移住する人のことを指す。一般的に、「日系人」、「日系アメリカ人」という言葉で日本からの移民及びその子孫を呼ぶことが多いが、そのような呼び方は、本論の後半でも述べるように、歴史的に正しくない。移民は、意識の面でも、法律の面でも、日本人であり、それを「日系」という、日本人でないような呼び方をするのは事実と反するからである。

- (3) 阪田安雄「脱亜の志士と閉ざされた白哲人の楽園：民権派書生と米国に於ける黄色人種排斥」田村紀雄・白水繁彦編『米国初期の日本語新聞』（勁草書房，1986年），109-16，120-21.
- (4) しかし，同化期末期に至り，後の時期につながる愛国心の高揚が見られる。日清戦争に際して，サンフランシスコ近辺の日本人が一万八千円を寄付したという。藤賀与一『日米関係在米国日本人発展史要』（米国カリフォルニア州オークランド：米国聖書教会日本人部，1927年），81。ロサンゼルスでは，1893年，有志が集まって天長節を祝ったことが記録されている。John Modell, *The Economics and Politics of Racial Accommodation: The Japanese of Los Angeles, 1900-1942* (Urbana: University of Illinois Press, 1977), 17.
- (5) 日本政府，アメリカ政府によって行われた，日本人移民の人口調査の資料をもとに，移民の出身階級について分析中である。現在のところ，この時期の移民は武士階級出身者の比率がかなり高いと言えそうである。ハヤシのキリスト教会メンバーの研究も，移住時期の早いほど士族の比率が高いことを示している。Hayashi, "For the Sake of Our Japanese Brethren," chap. 3. もしこの仮説が証明できればさらに次のことが考えられる。まず，彼らが，維新後失職した，あるいは経済的に没落した士族の子弟であること。次に，徳川時代の武士がそうであったように，彼らも都市住民であり，つまり，都市における余剰人口であったこと。第三に，士族でありながら，明治政府の官職に就くことができず，海外留学によって，立身出世をはかるといふ彼らのあり方が，明治政府に対抗して自由民権を主張した士族のあり方を連想させること。第四に，移住の時期が，明治政府による国民統合政策の完了する前であることから，日本国家に対する強い忠誠心が強く見られないであろうこと。
- (6) 阪田「脱亜の志士と閉ざされた白哲人の楽園」128-31，136-38.
- (7) たとえば，Milton M. Gordon, *Assimilation in American Life: The Role of Race, Religion, and National Origins* (New York: Oxford University Press, 1964) を参照のこと。アメリカ史の文脈の中で同化，文化多元主義などを考察したものとして John Higham, *Send These to Me: Immigrants in Urban America*, rev. ed., (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1984) が役に立つ。
- (8) 1890年頃から純粋な労働移民が増加し始める。Yuji Ichioka, "Japanese Immigrant Labor Contractors and the Northern Pacific and the Great Northern Railroad Companies, 1898-1907," *Labor History* 21 (Summer 1980): 325-50 は，鉄道建設のための労働力供給システムが移民コミュニティにできあがったことを述べている。注5との関連で，この時期の移民が農民主体になったことについて，次のことが考えられる。まず，彼らが，農村における余剰人口であったこと。次に，この時期における海外移住が，人口問題解決，海外発展といった政府の方針と合致するものであったこと。第三に，義務教育，教育勅語を通じた明治国家のイデオロギーの浸透が全国まで行き渡り，日清，日露戦争によって定着を見る頃に彼らが移民したこと。なお，第一の点は出移民の原因と関係している。これについては児玉，石川による長年の研究蓄積があるが，阪田が論ずるように，少数の出移民地域についての研究がなされても，移民をほとんど出さなかった地域との比較がなされなければ，真の原因を特定することができない。児玉正昭『日本移民史研究序説』（広島：溪水社，1991年），石川友則「沖縄自由移民の社会地理学的考察：旧首里市の場合を例として」『人文地理』第22巻（1970年2月）：82-101；Yasuo Wakatsuki, "Japanese Emigration to the United States, 1866-1924: A Monograph," *Perspectives in American History* 12 (1979): 389-516；阪田安雄「日本人アメリカ出稼の『地域性』の一考察 (I-III)」『国際学論集』（大阪学院大学）第1巻第1号（1990年12月）：59-84；第1巻第2号（1991年3月）：149-171；第2巻第1号（1991年9月）：77-111。児玉，石川の他の研究については桑井輝子・飯野正子「日本における日本人移民・日系アメリカ人研究」『東京大学アメリカ研究資料センター年報』第13号（1990年）：31-33を参照のこと。
- (9) 一連の排日運動の分析は Roger Daniels, *The Politics of Prejudice: The Anti-Japanese Movement in California and the Struggle for Japanese Exclusion* (Berkeley and Los Angeles: University of California

- Press, 1962; reprint with a new supplementary bibliography, 1977) に詳しい。
- (10) 1908年の所謂紳士協定は労働移民の禁止を日本の自主規制という形で行ったものである。また、1920年には、アメリカの写真結婚非難に答え、写婚婦人に対するパスポートの発給を停止した。
- (11) Yuji Ichioka, "Japanese Associations and the Japanese Government: A Special Relationship, 1909-1926," *Pacific Historical Review* 46 (August 1977): 409-37.
- (12) Gordon, *Assimilation in American Life*, 141-54; Higham, *Send These to Me*, 198-232.
- (13) Yuji Ichioka, "The Early Japanese Immigrant Quest for Citizenship; The Background of the 1922 Ozawa Case," *Amerasia Journal* 4: 2 (1977): 1-22.
- (14) 松岡洋右が、1902年から1902年までの間、オレゴンで働きながら学校へ行き、大学を卒業したことを移民はよく知っており、彼らのヒーローであった。三輪公忠『松岡洋右：その人間と外交』（中公新書、1971年）、20-38.
- (15) 新里貫一『事変下の満鮮を歩む』（新報社、1938年）。ブラジル移民の類似した日本回帰については前山隆『移民の日本回帰運動』（日本放送出版協会、1982年）を見よ。
- (16) 米山「日系二世と『アメリカニズム』」、106-7.
- (17) Brian Masaru Hayashi, "Early Spoilage: Another Look at the Poston and Manzanar 'Incidents' of 1942," paper presented as part of the symposium "Views from Within: The Japanese American Wartime Internment Experience," University of California, Berkeley, 19-20 September 1987, photocopied.
- (18) 阪田安雄「移民研究における二つの空間：アメリカの日系人研究資料コレクションの評価」『移民研究の歴史的考察とその課題』（日系移民資料集北米編 第18巻）（日本図書センター、1994年）：20-23, 32-35.
- (19) 同上、13-17.
- (20) Paul R. Spickard, "The Nisei Assume Power: The Japanese Citizens League, 1941-1942," *Pacific Historical Review* 52 (May 1983): 147-74.
- (21) Donald Collins, "Disloyalty and Renunciation of U. S. Citizenship by Japanese Americans During World War II," (Ph. D. dissertation, University of Georgia, 1975); John Christgau, "Collins versus the World: The Fight to Restore Citizenship to Japanese American Renunciants of World War II," *Pacific Historical Review* 54 (February 1985): 1-31.
- (22) Frank F. Chuman, *The Bamboo People: The Law and Japanese-Americans* (Del Mar, Calif.: Publisher's, 1976), 308-313.
- (23) 阪田「移民研究における二つの空間」、15-16, 43.
- (24) Kashima Tetsuden, "Japanese American Internees Return, 1945 to 1955: Readjustment and Social Amnesia," *Phylon* 41 (Summer 1980): 107-15; 竹沢泰子『日系アメリカ人のエスニシティ：強制収容と補償運動による変遷』（東京大学出版会、1994年）、第3章.
- (25) Yuji Ichioka, "Introduction," to *A Buried Past: An Annotated Bibliography of the Japanese American Research Project Collection*, comp. Yuji Ichioka and others (Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1974), 11; Roger Daniels, "American Historians and East Asian Immigrants," *Pacific Historical Review* 43 (November 1974): 469-70.
- (26) Bill Hosokawa, *Nisei: The Quiet Americans* (New York: William Morrow & Co., 1969); Chuman, *The Bamboo People*; Robert Wilson and Bill Hosokawa, *East to America: A History of the Japanese in the United States* (New York: William Morrow & Co., 1980); Bill Hosokawa, *JACL in Quest of Justice* (New York: William Morrow & Co., 1982); Masakazu Iwata, *Planted in Good Soil: A History of the Issei in United States Agriculture*, 2 vols., (New York: Peter Lang, 1992).
- (27) 本論で扱っているような「公式見解」が補償運動の中でどのように用いられ、成果を挙げたかにつ

いては、竹沢『日系アメリカ人のエスニシティ』、第5-6章を参照のこと。歴史の神話化の過程が分析されている。

- (28) Ichioka, "Japanese Immigrant Nationalism"; Hayashi, "Early Spoilage." 後者は、口頭発表されたが、本人の希望により、シンポジウムの記録である Yuji Ichioka ed., *Views from Within* (Los Angeles: Resource Development and Publications, Asian American Center, UCLA, 1989) には収録されていない。
- (29) 阪田「脱亜の志士と閉ざされた白哲人の楽園」、73-4; 前山『移民の日本回帰運動』
- (30) Michael J. Piore, *Birds of Passage: Migrant Labor and Industrial Societies* (Cambridge: Cambridge University Press, 1979); Saskia Sassen, *The Mobility of Labor and Capital: A Study in International Investment and Labor Flow* (Cambridge: Cambridge University Press, 1988); Dino Cinel, *The National Integration of Italian Return Migration, 1870-1929* (Cambridge: Cambridge University Press, 1991).
- (31) 例えば、ジョン・ハイアムは、アジア系民族に対する反対運動は、「アメリカの排外運動の主流からすると、少し別の問題であって、歴史的に見れば重要でない」と述べている。John Higham, *Strangers in the Land: Patterns of American Nativism 1860-1925* (New Brunswick, N.J.: Rutgers University Press, 1955; reprint with corrections, New York: Atheneum, 1963), "Preface to the Second Edition."